〈編集後記〉

暑い夏

例年になく寒い冬が終わったかと思うと，その反動のように暑い夏がやってきた。KONC会誌編集事務局は4階建て学舎の最上階の一室にあるが，あまりの暑さに朝からエアコンのスイッチを入れる日が続く。編集事務局の部屋も含め，この学舎の4階の部屋には，たいていエアコンがある。エアコンが設置されるようになった理由は，学舎を建設した大阪市がリッチだったからでは無い。学舎の利用者である学生や教員がことさら贅沢だったからでも無い。その理由は学舎の屋上が紙のように薄いコンクリートで作られてしまったことにある。薄い屋上は盛夏の暑熱を遮るものとはなり得ず，昼には太陽からの熱を直に直下の部屋に送ることに加え，夜にも昼に蓄積した大量の熱を建物の隅々にまで送り続けるからである。屋上からの熱の最初のレセプターは，直下の4階の部屋となることは，昼間と変わらない。このような校舎が建てられたのは，建設費を節約する方が，空調のための光熱費を長期間払い続けるよりは，はるかに安上がりだと判断されたからだと理解したい。そうでなければ，貧乏人の銭失いの「いろはがるた」の世界に陥ってしまわざるを得ず，経済原則にも血税浪費の戒めにも合わない。編集事務局の隣の部屋は計算機室兼喫茶室となっていて，ランチはここで食べる。この部屋にもエアコンがあるが，取り付けてから12年ほどになる代物である。酷使しすぎたためか，7月末にはエアコンはダウンし，暑い風しかでなくなった。研究費に事欠く状況で，エアコンを取り替えることは手痛い出費であるが，朝から35℃の室温は耐え難い。やむなく電気屋さんに装置の取り替えをお願いすることになった。

気象学の事典によれば，気温が32℃を超えると，ヒトの労働能率は極端に低下するとされている。状況は植物でも似ているようだ。スギやヒノキの苗木では，葉の光合成速度は20℃前後で最大，32℃で最大値の約80％，38℃では約50％となることが知られている。8月上旬の関西では，日中の最高気温がしばしば37℃や38℃に達したが，葉温は更に高かった筈である。節水を気にかけながらも，朝晩の水やりを欠かさなかったが，庭のヒメアオキとユキツバキは葉先が枯れた。全体が枯れてしまった葉も，もちろんある。被害の程度は幹の先端ほど激しい。葉の枯れた部分は，ヒメアオキで黒色，ユキツバキで赤褐色に変化し，無惨な姿となった。不思議なことに，ヤブツバキの葉には異常は生じなかった。猛暑のせいなのか，紫外線などの他の異変のせいなのか，真の理由は定かではないが，今年の夏のわが家の庭は，ユキツバキのような日本海要素の植物にとって過酷な環境となってしまったらしい。渇水が樹木に与える影響は，単年度では終わらない筈である。庭のユキツバキには来年どのような変化が起こるのであろうか。

エアコンが壊れ，庭の木が弱っただけでは無い。熱帯を思わせる突風をともなう豪雨（俗称ではスコール）や雷が各地で局所的に発生し，春日山ではカシの大木が倒れた。実際には起こらなかったようであるが，ヒートアイランドと化した都市では局所的豪雨による洪水や落雷による通信網の混乱も起こり得た。このような災害の誘因となる今夏の猛暑の犯人として，ダイポールモード現象が示唆されている。この聞き慣れない気象学の用語はインド洋西部の海水温が平年より上昇する現象を指し，この現象が起こると日本は猛暑になるそうである。1994年夏の猛暑はこの現象が原因であったのだという。今年の夏は終わりかけのラニーニャ（太平洋赤道帯西部の海水の昇温）の影響も重なって，さらなる猛暑と水

不足が危惧された。幸いなことに，8月中旬から下旬にかけて太平洋岸沿いに国土を縦断した台風11号が恵みの雨をもたらし，予想された深刻な水不足は緩和され，節水制限も解除された。関空では一部で浸水騒ぎがあったようであるが，台風が来ると良いこともあるという，月並みなことに改めて感動する。

KONC会誌23巻1号を何とか印刷できてほっとしている。とはいえ，本誌は5月末には印刷を完了して会員諸氏のお手元に届けられるべきはずのものであった。今回も会員諸氏にお詫びしなければならない。原稿不足による会報編集の渇水状態が依然解消されていないことは，以前と変わらない会誌発行遅延の理由である。編集委員による投稿原稿の査読期間は2週間となるよう努めているので，査読の徹底が会誌発行を遅らせたとは思わない。英文論文も含め，会誌への投稿数は緩やかに増加しているので，将来的には原稿プールの渇水状態からの脱却を期待する。

（山倉拓夫）

査読期間のお知らせ

上の拙文にあるように，編集委員による投稿原稿の査読期間は2週間です。投稿論文の会誌掲載の可否を迅速に投稿者にお知らせします。ふるってご投稿下さい。

本巻号の特別査読者

編集委員以外に投稿論文の査読をお願いした，牧岩男先生および米田健先生に深く感謝致します。